

地域の「宝」 イタセンパラ保護への取り組み

氷見市教育委員会 生涯学習課

●はじめに

私たちの住む氷見市（ひみし）は、富山県の西北、能登半島の東側付け根部分に位置しています。多くの幸をもたらしてくれる「青い海」と「みどり豊かな大地」を有し、人の心を引きつける自然の恵みに包まれています。

氷見市位置図

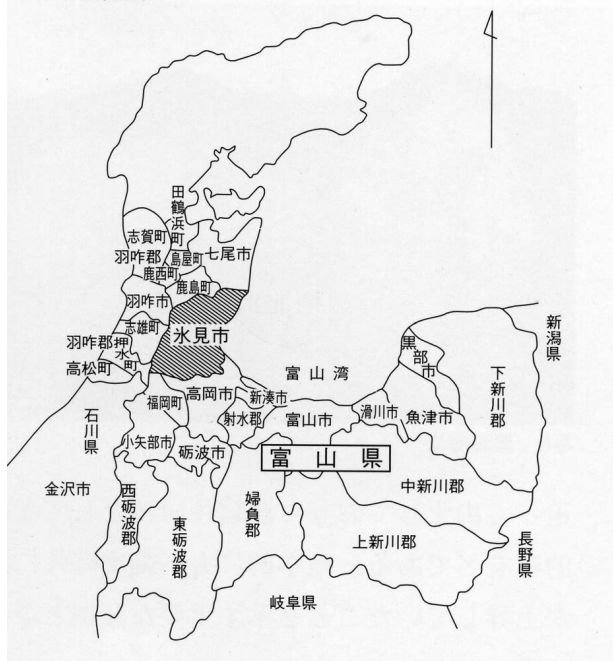


図1. 氷見市の位置

日本海側有数の氷見漁港には、四季を通じて156種類もの魚が水揚げされ、初夏の「マグロ」、冬の「寒ブリ」、そして「氷見いわし」は広辞苑にも掲載されるほど有名です。また、日本ではじめて発見された洞窟住居跡「大境洞窟」や万葉の歌人大伴家持ゆかりの史跡など、歴史のロマンにも満ちあふれています。さらに、富山湾と二上丘陵に囲まれた豊かな自然環境のもとで、イタセンパラやオニバスといった貴重な動植物を今に伝えています。近年は市内各地で温泉が湧出し「能登半島国定公園・氷見温泉郷」の名称でPRに努めています。

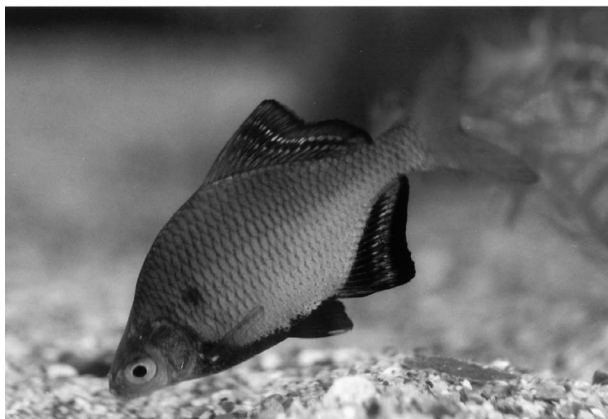


写真1. イタセンパラのオス



写真2. オニバスの花

●イタセンパラ絶滅が危惧される淡水魚ー

みなさんは、「イタセンパラ」という魚を知っているでしょうか。はじめてその名前を聞くという方が多いのではないかと思います。イタセンパラはコイ科タナゴ亜科に属している淡水魚です。「イタセンパラ」という名前だけを聞きますと、その発音から「外国の魚」と思われる方もいるようですが、日本だけに生息している淡水魚です。

漢字で示すと「板鮮腹」となり、「平べったく板のような形をしており、鮮やかな腹をしている魚」というところから、その和名が付けられたといわれており、現在の生息地は、大阪の淀川水系・愛知県の濃尾平野・そして氷見市の一部河川に限ら

れていますが、主要生息地である淀川水系において2006年から稚魚が全く確認されないなど、野生絶滅の危機が高まっている淡水魚です。

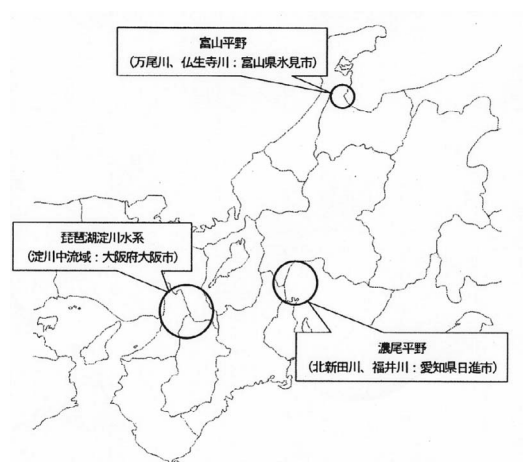


図2.イタセンパラの生息分布図

富山県内の分布は射水平野と氷見市の十二町瀕周辺河川に生息していたとの記録があります。しかし、射水平野では1958年以降の確認はなく、絶滅したと考えられています。本市においては、1965年頃に絶滅したとされていたイタセンパラが平成元年に万尾川、平成10年に仏生寺川で再発見されました。以来、生息域での調査、イタセンパラ保



写真3. 秋の万尾川（水位が低い）

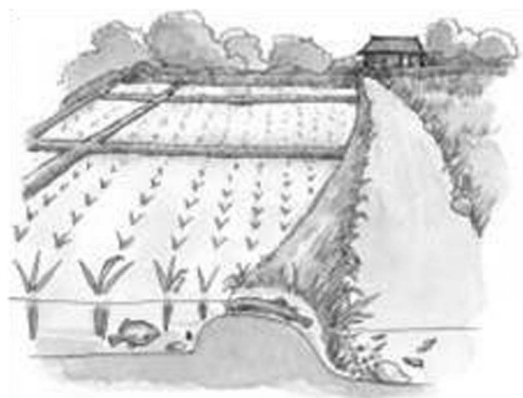


図3. 万尾川周辺部の様子

護池の造成とそこでの増殖個体の管理や調査研究を中心に、地域住民や小学校と連携しながらイタセンパラの保存とその活用を目指しています。

イタセンパラは昭和49年に天然記念物（文化庁・文化財保護法）に、平成7年に国内希少野生動物種（環境省・種の保存法）に指定され法的規制が非常に厳しい魚となっています。しかし「一部の研究者だけが扱える魚」であってはならないとの信念から、本市では地域に根ざした保護に重点を置いています。2007年12月にNHK放送「ダーウィンが来た」にて「氷見市におけるイタセンパラ再生への取り組み」を紹介するなど、積極的に全国への普及啓発活動も行っています。昨年度からは、市内小学校における総合学習授業での教材として用いるなど、イタセンパラが地域の宝であると認識してもらうことから、生息地の保全活動につなげたいと考え事業を進めています。



写真4. 大阪府八尾市でのポスター発表



写真5. 福井県大野市での個体展示

●イタセンバラ保護増殖事業計画 ー保存から活用へー

氷見市では河川環境の悪化やオオクチバス等の影響によりイタセンバラの生息が危ぶまれていることから、氷見市イタセンバラ保護増殖事業計画を策定し事業を進めています。イタセンバラ保護池を整備することでイタセンバラの繁殖に毎年成功した結果、平成18年8月に文化庁より「イタセンバラを管理する地方公共団体」に指定され、平成19年3月には環境省の「イタセンバラの保護増殖事業計画」に適合した地方自治体として飼育研究に取り組んでいます。イタセンバラ保護池では毎年約2000個体のイタセンバラの繁殖に成功し、一部のイタセンバラを小学校における総合的な学習の時間で取り扱い、絶滅危惧種に対する教育や環境教育への積極的な活用を実施しています。



写真6. オオクチバスの胃内容物（消化されたイタセンバラ）



写真7. イタセンバラ保護池

(1) イタセンバラの種の保存に資する活動

氷見市ではイタセンバラ保護池を造成し、イタセンバラ稚魚数の確認や蛍光イラストマーを用いた標識放流を行い、個体数の推定業務を実施しています。また、池内における二枚貝の成長度、肥満



写真8. 保護池で繁殖したイシガイ



写真9. 万尾川での二枚貝調査

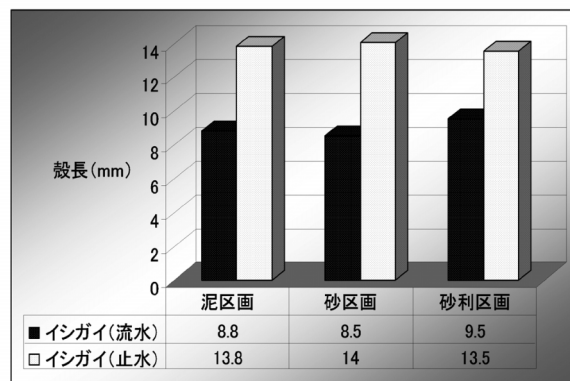


図4. 保護池におけるイシガイの成長

度の調査及びプランクトンの同定業務やイタセンバラを含めた環境調査を幅広く実施しています。昨年度からは、氷見のイタセンバラ生息2河川のマイクロサテライト法による遺伝分析や淀川系群との比較など、専門的な研究においても富山大学、北海道大学及び大阪府水生生物センターと共同研究を行いながら調査研究を進めています。

(2) イタセンバラが「とやま未来遺産」に選定される！

私たちの身近なところには、暮らしとつながりの深い“地域のたからもの（地域資源）”がたくさんあります。また、次代に引き継ごうとする、いろいろな取り組みもはじまっています。「とやま未来遺産」は、これらの“地域たからもの”を再発見し、保存・継承していくための活動を支援することにより、地域の魅力を引き出し、地域全体の活性化につなげていこうとする取組が始まっています。その「とやま未来遺産」の一つに、「布施の水海（ふせのみずうみ）の名残をとどめる水生生物、イタセンバラとオニバス」が選定されており、イタセンバラやオニバスを守るために多くの地域住民が協力しています。

①イタセンバラを守る市民の会

（惣領地区 会員数56名）

定期的に保護池を除草し、密漁などを警戒している。また現地見学会なども実施しています。

②氷見市外来魚駆除調査員制度

（外来魚駆除活動 会員数14名）

イタセンバラの産卵期後の1月から3月までの間、イタセンバラ生息間の仏生寺川及び万尾川において、刺し網や投網を使用し外来魚駆除活動を実施しています。



写真10. 氷見市外来魚駆除調査員の活動

③氷見市自然保護員協議会との連携活動

（イタセンバラ稚魚調査 会員数20名）

仏生寺川及び万尾川におけるイタセンバラの生息域や個体数を調査する際に、氷見市自然保護員協議会と連携し、イタセンバラの稚魚調査や保護池内の調査を実施しています。

④氷見市オニバス研究会

（オニバスの再生活動 会員数11名）

過去のオニバス保護の取り組みについて精査し、これまでに得られた知を元に各種実験を行い、十二町潟におけるオニバス復活のメカニズムを明らかにしています。平成20年度には十二町潟内で130株のオニバスの自生を確認しています。



写真11. 氷見市オニバス研究会の活動

(3) 次代を担う子どもたちへの啓発活動

市内小学校での天然記念物保護に理解を深めるとともに、絶滅危惧種に対する教育、郷土学習及び環境教育への積極的な活用を目的とし、イタセンバラ保護池にて繁殖した個体を用いて氷見市立十二町小学校5年生が総合的な学習の時間においてイタセンバラの学習をすすめています。学習に際しては、教育委員会の学芸員と学習を進めることで、より詳しい授業が可能となっています。児童個々にイタセンバラに関する疑問点を設定し、飼育や調べ物を模造紙に発表しました。また学年発表会でも地域住民にイタセンバラを知ってもらうために、劇を演じるなど、地元に対する普及啓発を進めています。

小学校では飼育のみに留まらず、水槽内で産卵行動を確認するなど貴重な体験を通してイタセンバラの生態を理解しています。室外のタンク水槽では、イタセンバラの増殖にも挑戦しています。また、学芸員が表に出すぎると子ども達の達成感が得られにくいことから、子ども達が考えた飼育方法や考え方を尊重しながら、総合的な学習の時間を提供するなどの工夫をしています。



写真12. イタセンパラの体長を測る小学生



写真13. イタセンパラを観察する子どもたち

●小魚の保護から地区の自然を理解する

増殖させた個体を用いて、イタセンパラを展示するだけではなく、同時にイタセンパラの生息する十二町地区の自然について紹介する機会をつくることで、イタセンパラ以外にも重要であるミナミアカヒレタビラや富山県では絶滅種に指定されているオニバスについての関心も広がるなど、イタセンパラを活用することで、住民が地区の自然について積極的に取り組むきっかけになっています。その具体例として、十二町潟の水管理において稲作だけではなく動植物に配慮した水管理を行うこ



写真14. 十二町潟に自然発生したオニバス

とで、絶滅種であったオニバスが26年ぶりに十二町潟で自然発生し、市民の関心を高めるなどの良い相乗効果も生み出しています。また、小学校において個体展示が可能となったことから、イタセンパラを通して地元河川について学ぶ機会が提供でき、貴重な郷土学習へつなげることが可能となった。イタセンパラという小魚の保護から、地区の自然を守るための地域の大きな取り組みへ広がりをみせています。

●イタセンパラは「地域の宝」！

氷見市では、イタセンパラを「市民の宝」「地域の宝」として位置付け広く活用し、行政・市民が一体となり、「イタセンパラと共に繁栄するまちづくり」を目指して、川のみでなく山も海も含めた氷見市全域の環境保護活動の基点とするべく事業を進めています。今後は、イタセンパラの保存を踏まえながら、その活用や生息地の保全に力を入れて行きたいと考えており、今後は保護池で増殖させたイタセンパラをオオクチバスなどの影響を見極めながら野生復帰させていくことも検討しています。



写真15. イタセンパラの展示説明会

本市には多くの天然記念物が存在しています（国指定4件、県指定7件、市指定8件）。その中でも、イタセンパラは普段目にするのがないため、市民の意識の外にある天然記念物という印象が強く、認知度が非常に低い天然記念物でした。また、イタセンパラはかつて「ベト」「ベコ」「ベッコヨ」と呼ばれ食用魚としては小鮒以下の評価しか受けておらず、捕えてもすぐに捨てられていた魚であり、地元では大切にするという意識がなく、地元

住民と河川改修の是非をめぐるしばしば対立になる厄介者でした。そのため、まずイタセンバラという魚を地元の方に知ってもらい、学んでもらうことで市民と一緒に保護を進めていくという方策を打ち立てており、イタセンバラの普及啓発活動に力を入れてきました。

氷見において、魚といえば、真っ先に思いつくのは「氷見ブリ」ではないでしょうか。イタセンバラはブリなどの食用魚に比べると、生活に直接的な関わりがないため、興味・関心が希薄になりがちかと思います。今後もイタセンバラの普及啓発活動を進めて行く中で、近い将来、地元住民を中心に「イタセンバラを保護していこう！」という大きな声があがってくるような活動を続けていかなくてはなりません。これからも、氷見市のイタセンバラ再生事業は市民の目に見える形で進め、市民の意識が高まるような活動を続けて行きたいと考えています。

氷見市教育委員会生涯学習課 学芸員 西尾 正輝